(夕刊)　91.9/24　毎日夕刊　(第3種郵便物認可)

田畑に汗流し身体訓練の集団

「農と芸」に生きる

前衛舞踏の田中泯さんに聞く

人間の身体の自由さ、とはどういうことなのか。農耕を手がかりに身体の奥底にひそむ動きを探っている前衛舞踏の第一人者、田中泯（みん）さん（四七）。この夏、南アルプス連山のふもとで開いている「からだの学校」には、世界二十カ国から約四十人もの人々が集まり、農作業に汗を流しながら、身体訓練に励んでいた。「地球を道（は）う一人の前衛」という田中さんに「農と芸」について聞いた。

（池田　知隆記者）

大地の生命力を躍動させて舞う田中泯さん

◎身体気象農場で

甲斐駒ケ岳を望む山梨県北巨摩郡白州町で田中さんが七年前に開いた「身体気象農場」。水田、畑、牧場など約五万平方㍍の農場に、鶏、ヤギ、ウサギ、ロバと田中さんが主宰する「舞塾」の塾生十六人が共同生活している。

「踊りは、自分の身体から浴衣をきて盆踊りにいく欲してやるもの。踊りすぎると、身体が自分よりも先にいってしまい、なんだか機械のようになってしまう。ひょっとして自分の身体に踊りがなくなっているのではないか。そんな気がして子供のころからあこがれていた農業を始めたので」

東京生まれ。幼いころの開かれた一九六四年、当時最強だった東京教育大バスケット部へ。いつしか進んでも「男のくせに」と他の男子からいじめられるほど好きで、隠れて盆踊りの会場に行ったこともある。やがてバスケットに夢中になり、東京オリンピックの開かれた一九六四年、当時最強だった東京教育大バスケット部へ。いつしか

「踊りの原点、農業に」

共感の輪、世界に広がる

南ア山ろく

「踊りも農業も限りない楽しさがある」という田中泯さん

なくて、コミュニケーションのための表現でした。病人がでれば励まして回復するために、うれしいときにはうれしさを倍加するために、わからないことがあればそれをもうために踊っていた。そんな地域の奥まったところで生まれた踊りが芸として、都会の人たちを楽しませていったのがダンスが先ですか、感覚が先ですか」と問いかける。「大昔の人は、高楽でハラハラという前にハラハラという感覚が身体にあったと思う。僕なんか、ハラハラという高楽で見てしまうのが、苦しいのです」。身体にひそむ原初的感覚を深く探っている。

◎五千人が集まる

過疎化が進む白州町で最大規模の田畑を耕し、東京の生協に有機農業でつくった野菜や卵を出荷。地元の農家が苗を買いに来るなど。「刻々と成長する作物の姿、収穫の喜び、気候との関係など農業にはキリがないほど楽しみがある。自分たちのやっていることが少なくとも何百人かの人の楽しみにつながっていくような生業（なりわい）としての農業が基本です。踊りも同じで、観客がいないと成りたちませんから。そして自然の中から有機的に自分に充満してきたときに舞踏が生まれてくる」

大地に根ざした祭りを、と白州町で開いた国際フェスティバルは今夏で四回を数えた。「いま地方では、若者たちが出ていき、テレビ文化が流れ、中央の〝おすそわけ〟の文化が拡大している。そんなところで、もろに生きているとこに直結した表現を出してみたらどうだろうか。村の人が一年間待ち遠しいようなものを作りたかったのです」と田中さんは楽しそうに語る。野外彫刻があちこちに作られ、海外からも含め延べ五千人もの人が参加し、共感の輪が地域から世界へと広がっている。

秋の収穫が終わると海外公演にでかける。「農業をやっていると身体の雰囲気も変わり、うちのダンサーが他のダンサーと並んでいると、すぐわかり、うれしくなる。ボーッとしているだけでもつのです。なんかちょっと違うぞって。おそらく野菜みたいになっているのじゃないかな。僕なんかサツマイモなど見てるだけで魅力的だけど……」

日が落ち、闇（やみ）に包まれた民宿の庭先で田中さんの舞踏を見た。塩で四方の境界をつくり、急きょしつらえた土の舞台。大地の生命力を躍動させて舞う田中さんは「自分はいわば〝自分自身の例題〟。自分を実験台にして生きたい。それが一番楽しいのではないかな」ともいっていた。農業と舞踏。生業と自己の探求。それを見事に結合させた生き方には圧倒的な存在感が漂っていた。